

日本語アクセントの表記に関する考察 三線式表記法

神 田 卓 朗

教養・言語センター

(2002年9月12日受理)

Looking into the Recording of Japanese Accents Using Diagrams of Three Lines

Center for Languages and General Education,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu City, Japan (〒501 - 2592)

KANDA Takuo

(Received September 12, 2002)

1. はじめに

国語学の各分野の中でも、音声は重要な研究対象であり、特に日本語アクセントについては、長年にわたり先達諸氏によって秀れた分析や研究が行なわれている。東京式アクセントを集大成した労作「日本語発音アクセント辞典」や「明解日本語アクセント辞典」などは、良く知られているところである。しかし、これらの辞典は、言語研究者や教育関係者、アナウンサーや俳優、或いはそれらを志す人たちに、研究上・教育上・発音上いずれも大きな役割を果たしているものの、日本人の誰もが知っていて活用している訳ではない。むしろ、日本語のアクセント辞典の存在自体を知らない人の方が多いだろう。

本来、日本語のアクセントは、日本人であれば誰が知っていてもおかしくない筈だが、実態としては、研究者やアナウンサーなど特定の人たちの専有知識のようになっている。なぜそうなっているのか。また、どのような方法によって、多くの日本人が母国語のアクセントの知識を共有することが出来るようになるのか。本研究のテーマは、本学で教職に従事する以前の、地方民放局アナウンサー時代から持ち続けていた、このような疑問が背景にある。

共通語アクセント(実態は東京式アクセント)は、アナウンサーという仕事の性質上、必要不可欠な知識である。他県民放局のアナウンサーたちと話し合う時、アクセントについての共通認識を基に、それぞれの地方の方言に関しても、アクセントの型が分かれば、お互いにほぼ把握でき、発音し合うことが可能であった。

では、一般の人たちのアクセントに関する感覚や知識はどうなのだろうか。このことを知る具体的なケースがあった。民放局在職当時、担当していたラジオ番組で、岐阜方言のアクセントが違っていた時や、方言アクセントが分からないような時に、何人かの聴取者から、アクセントのある箇所に、・印をつけたり傍線を引いたメッセージが、FAXやEメールで届いたことが何度かある。このこと

を通して、誰でもある程度アクセントを意識し、感覚的に把握していることが分かる。

また、アクセントについて考えさせる次のようなこともあった。かつて、サッカーJリーグのチーム「ジュビロ磐田」が発足するに当たり、地元静岡のテレビ局から民放各局のアナウンサー宛にFAX連絡が届いた。その内容は「このほどJリーグの地元チームとして誕生する『ジュビロ磐田』のアクセントについて」として、「共通語アクセントでは、磐田は『イワタ』（傍線部分にアクセントがある）となるが、地元静岡のアクセントでは『イワタ』（同上）と『イ』が高くなるので、各局とも共通語アクセントの『ジュビロ・イワタ』ではなく、『ジュビロ・イワタ』と地元のアクセントを尊重してほしい」という要望であった。全国的にアナウンサーの間では、地方の地元のアクセントを尊重しようという動きが以前から見られるが、「ジュビロ・イワタ」はその具体的な表われの一つである。

共通語であれ方言であれ、多くの人にとって、簡単な語い（単語）のアクセントの違いを把握することは可能であろうが、様々な語や活用形、それに文のアクセントについては、分かりにくいというのが実情だろう。このような日本人の日本語アクセントに関する認識の問題は、過去の国語教育カリキュラム内容に根ざしていると思われる。平均的日本人は、中学校時代に始まる英語の授業の時、英語の辞書を使って単語の意味を知り、発音やアクセントを学ぶ。ところが、小中高校時代の国語の授業で、日本語のアクセントについて学んだ人は、殆どいないのではないだろうか。振り返ってみると、日本語を「読む・話す」ための基礎となるアクセント教育は、明治時代に国語教育が始まっていらしい、これまで殆ど実施されてこなかったのである。こうして、日本人は体系的なアクセント教育を受ける機

会がなかったため、母国語日本語のアクセントを知らない、分からないという極めて珍しい状況が現在も続いている。

人間には、言語形成期（5才～11才）があり、この期間に、育った地域の語い・アクセント・音韻・語法を身につけるといわれているが、この時期に学校でアクセント教育を実施すれば、「日本人が知らない日本語アクセント」という不思議な状況は、大きく好転する可能性がある。

音声研究の中でも、アクセント研究が進んでいることは事実だが、学校教育にせよ個人で取り組むにせよ、日本語アクセントをより学びやすくする方法を考えることも重要なことである。特にアクセントを学ぶ際に必要な表記法は、二段観に基づくアクセント辞典を除くと、各研究者独自のものが多く、誰でも分かる明確な表記法は、まだ確立されていない。そこで本研究では、主に東京式アクセントについて、二段観に基づく表記法の問題点を指摘すると共に、アクセントの実態に即しつつ視覚的にも理解しやすい、三段観に基づく三線式表記法を新たに提起し、考察する。

2. 日本語は高低アクセント

世界の言語は、大きく2つのアクセント体系に分かれる。1つは強弱アクセント、もう1つは高低アクセントである。強弱アクセントは、英語・ドイツ語・イタリア語・スペイン語・ロシア語・ポーランド語などヨーロッパ語に多く見られる。

一方、高低アクセントは、日本語をはじめアイヌ語・中国語・タイ語・ビルマ語・チベット語・パンジャブ語などアジアに多いほか、リトアニア語・西アフリカエウェ語・パンツー諸語・アメリカインディアンのマザテコ語などにも見られる。

このように、日本語のアクセントは高低ア

クセントであり、基本的には音楽と同じ性質を持っているため音楽的アクセントとも呼ばれる。英名では、ピッチアクセントという。さらに日本語のアクセントは、東京式・京阪式・特殊式・一型式の4タイプに分かれるが、いずれも高低アクセントである。

3. 東京式アクセントと二段観表記

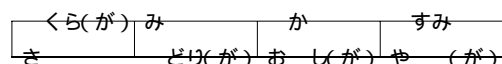
本研究では、これら4タイプのうち東京式アクセントの表記法について考察する。東京式アクセントには、平板型・頭高型・中高型・尾高型の4つの型があり、すべての語のアクセントは、この4つの型に集約される。

具体的に3モーラ(拍)語名詞として、「桜・緑・お菓子・休み」を例にとる。「さくら(桜)」は、「さ」のモーラ、「く」のモーラ、「ら」のモーラのうち、「さ」のモーラが低く、「く」と「ら」のモーラが高いアクセントとなる。このように、語の1モーラ(拍)目が低く、高くなる2モーラ(拍)目から最終モーラまでと、それに続く「は」や「が」などの助詞まで同じ高さのアクセントになるものが、平板型である。

「みどり(緑)」の場合、1拍目の「み」が高いアクセント、2拍目の「ど」と3拍目の「り」が低くなり、これを頭高型という。「おかし(お菓子)」は、1拍目の「お」が低く、2拍目の「か」が高く、3拍目の「し」が低くなる中高型である。「やすみ(休み)」は、1拍目の「や」が低く、2拍目の「す」と3拍目の「み」が高いアクセントとなり、この語に続く「は」「が」などの助詞が下がる。これを尾高型という。頭高型を除いて、平板型・中高型・尾高型は、すべて1拍目が低く始まる。

これら4つの語について、「日本語発音アクセント辞典」と「明解日本語アクセント辞典」では、共に、さくら(平板型)・みどり(頭高型)・おかし(中高型)・やすみ(尾

高型)と表記している。この表記は、高低を2段に分けている(二段観)ため、次のように、二線式でも表記することが出来る。但し()の中は、助詞の「が」である。



東京式アクセントの高低を2段に分けて表記する方法としては、研究者によって様々な形態のものが見られる。4拍語名詞「友達・富士山・青空・妹」を例に、いくつかの表記法を示す。

平板型	頭高型	中高型	尾高型
①ともだち ふじさん あおぞら いもおど	②ともだち ふじさん あおぞら いもおど(が)	③ともだち ふじさん あおぞら いもおど	④ともだち ふじさん あおぞら いもおど
⑤ともだち ふじさん あおぞら いもおど(が)	⑥下上上上 上下下下 下上上下 下上上上(下)	⑦L H H H H L L L L L H H L L H H H (L)	⑧ ()
⑨	⑩to[modachi Fu]jisan a[ozo]ra i[mō to]	⑪	
⑫ともだち ふじさん あおぞら いもおど(が)			

4. 二段観表記の問題点

前項3の二段観表記①~⑫を見ると、平板型アクセントの4拍語「ともだち」については、いずれも実態通りの高低表記になっている。しかし、頭高型・中高型・尾高型各アクセントの語については、実際の音の高低と異なる表記になっている拍がある。視覚的に見やすいと思われる⑪の二線式表記で、頭高型・中高型・尾高型の3つの語について確認してみる。まず頭高型の「ふじさん」は、1拍目の「ふ」と2拍目の「じ」は表記通りだが、3・4拍目の「さ」と「ん」は、「じ」よりも

更に音が下がっている。中高型の「あおぞら」は「あおぞ」までは表記の通りだが、4拍目の「ら」は表記よりもトーンが更に下がる。尾高型の「いもおと」は、4拍目まで表記通りだが、これに続く助詞の「が」の音が表記よりも低くなる。

同じように、3拍語の例としてあげた「桜・緑・お菓子・休み」も、平板型の「さくら」を除き、各型とも実際の音の高さと違う表記になっている拍が見られる。頭高型の「みどり」は、1・2拍目の「みど」は表記通りだが、3拍目の「り」は表記された「ど」よりも低いトーンになる。中高型の「おかし」は、1・2拍目の「おか」は表記通りになるが、3拍目の「し」は表記よりも音が下がる。尾高型の「やすみ」の場合、1・2・3拍目の「やすみ」までは表記通りだが、これに続く助詞の「が」のトーンが表記よりも下がっている。

このように、二段観による表記には、平板型アクセントを除き、実際の音の高低と一致しない拍が相当数見られ、無理のあることが分かる。二段観の問題点は、既に佐久間鼎をはじめ川上葵や山口幸洋によって論じられているほか、北原真冬は、二段高低表示が音声的事実にそぐわないという指摘をしている。

5. 三段観に基づく三線式表記法

東京式アクセントの三段観は、既に論じられているものだが、表記法については、依然確立されたものがない。そこで、視覚的に見やすく理解しやすい三線式表記法を新たに創り、4つのアクセント型の語について検証してみる。但し、三線式表記に当たっては、次のような原則を前提とする。

①三線式の最も下の線を下線、まん中の線を中線、最も上の線を上線と呼ぶ。②平板型アクセントの1拍語は中線に位置し、続く助詞は上線に位置する。③2拍以上の平板型の

語の1拍目は中線に、2拍目からあとの拍と次に続く助詞まで上線に位置する。④頭高型アクセントの1拍語は上線に、続く助詞は中線に位置する。⑤頭高型の2拍語は、1拍目が上線に、2拍目は中線に、続く助詞は下線に位置する。⑥3拍語以上の頭高型は、1拍目が上線、2拍目は中線、3拍目以降の拍は下線に位置する。⑦3拍語以上の中高型アクセントの1拍目は中線に、中1高型の2拍目、中2高型の2・3拍目、中3高型の2・3・4拍目は、それぞれ上線に、最終拍は下線に位置する。⑧2拍語以上の尾高型アクセントの1拍目は中線に、2拍目から最終拍まで上線に、これに続く助詞は下線に位置する。

こうした原則をもとに、2項で取り上げた3拍語「桜・緑・お菓子・休み」と4拍語「友達・富士山・青空・妹」、および5拍語の「隣り村・お月様・山桜・桃の花」を例に、三線式で表記すると、次のようになる。

平板型	頭高型	中高型	尾高型
くら(が)	み	か	すみ
さ	ど	お	や
	り(が)	し(が)	(が)
もだち(が)	ふ	あ	い
と	じ	あ	い
	さん(が)	ら(が)	(が)
なりむら(が)	お	まざ	ものはな
と	つ	や	も
	きさま(が)	ら(が)	(が)

このように、三段観による三線譜に書き表わすと、頭高型・中高型・尾高型各アクセントの語は、二段観による表記に較べ、より発音実態に近い表記となる。

6. 三段観三線式表記による文の適用例

いくつかの語に続いて、次に一つの文全体のアクセント表記について考えてみる。例え

ば「私はあさって映画を見に行く予定です」という文を、まず二段観二線式で表記する。文中「映画」予定」は、発音上連母音によって「えーが」「よてー」となるが、「ええが」「よてえ」と書く。(以下の例文も同じ)

たしは	さつ	えがを	み	てえ	で
わ	あ	てえ	にゆく	よ	す

この表記では、①「あさって」の「て」の低さが表わしていない。②文末の「予定です」が浮いたようなトーンになる...などの問題がある。次に、同じ文を三段観三線式で表記する。

たしは	さつ	えがを	み		
わ	あ	え	に	てえ	
		て	ゆく	よ	です

この三線式表記では、①「あさって」の「て」の音が低く表わされ、実際の発音に近い。②文末の「予定です」のトーンが落ちるアクセントの実態に対応している。すべてがそうなる訳ではないが、文の句読点では、トーンが下降する傾向があるため、三線式では、それらの語の一拍語を一線下げて表記する(以下同じ)。次に、良く知られている作品などの一部を三線式で表記する。

Ⓐ 「平家物語(巻第一・祇園精舎)」

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ...」。この文中の「祇園精舎」は、通常「ぎおんしょうじゃ」とふりがなをふるが、実際の発音に即して「ぎおんしょおじゃ」と書く。以下すべて同様である。

おんしょ	ねの	ぎょお	むじょおの
ぎ	お	か	こ
	じゃの	え	しよ

びき	らす	じよ
ひ	あ	さ
	り	お
	じゆの	は
		な
		の
		い
		る
		お
		し
		ゃ

すいの	とわりを	ごれるひと
ひつ	こ	らわ
		お
	あ	す
		も

さしか	た	は	めの
ひ	ら	だ	る
		よ	ゆ
	ず	の	の
			と
			し

た	の	つ	と
け	も	い	ろび
			ひえ
き	も	には	ほ
			ぬ
			に

ぜの	ま
か	え
	りに
	の
	ち
	お
	な
	じ

文中「諸行無常」は複合語のため、「無常」単独の場合は「む」が低く「じょお」が高くなるが、複合に伴い「む」が前のアクセントに連動して「じょお」と同じ高さになる。また「おごれるひと」の場合も同じように本来低い「ひ」が連動して高くなる。さらに「ちりにおなじ」の「お」も本来「なじ」より低い、連動して「なじ」と同じ高さになる。以下の文にも同じような現象がある。

Ⓑ 「初恋(島崎藤村作)」

「まだあげ初めし前髪の 林檎のもとに見えしとき 前にさしたる花櫛の 花ある君と思ひけり やさしく白き手をのべて 林檎をわれにあたへしは 薄紅の秋の実に 人こひ初めしはじめなり...」

ま	げそめ	えがみの	んごのもと	え
だ	あ	ま	り	み
		し		し
				と
				き

ま	し	な	なあ	みと
え	きた	は	は	き
		く	の	る
				お
				り

さ	し	て		ん	を	わ	た	え
や	ろ	を	の	り	れ	あ	し	
	き	べ	て		に	は		

す	く	れ	な	い	の	あ		と	こ	ひ	そ	め		
う					き	ひ						じ	め	な
					の	み	に			し	は		り	

ち	ば	ん	お	あ	く	な	し	ゆ					
い			ど				ぞ	あ	っ				
							く	で		た	そ	う	だ

の	し	よ	せ	え	と	い	う		き	ど	き	れ	わ	れ	を			
こ					の				と			わ			か	ま	え	て
					は												っ	

㉞ 「吾輩は猫である(夏目漱石作)」

「吾輩は猫である。名前はまだない。どこで生まれたかとんと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめしたところでニャーニャー泣いていたことだけは記憶している。吾輩はここではじめて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番獰悪な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を捕まえて煮て食うという話である。しかしその当時は何という考えもなかったから別段恐ろしいとも思わなかった...」

が	は	い	は	ね		ま	え	は	ま		ど
わ			こ	あ	な	だ	な	こ			
			で	る			い	で			

ま	れ	た		ん	と	ん	と				
う				と	け	お	か				
				か		が	つ	ぬ			

な		す	ぐ	ら	い	じ				ニ	ャ
ん	う			め		こ	ろ			ア	
で	も			じ	め	し	た	と	で	ニ	ャ

い	て	い	た	こ	と	だ	け			が	は	い	は
な							お	く		わ			
							は	き	し	て	い	る	

こ	で	じ		ん	げ	ん	と	い	う	も		か
こ		は	め	に						み	し	
		て								を	た	も

あ				れ	は	せ	え	と	い	う	ん	げ	ん	じ	ゅう	で
と		く	と	そ		し	ょ				に					
で	き															

て	く			か		の	と	
に	う		な	し		そ	お	
			と	い	う	は	じ	は

ん	と	い	う	ん	が	な		つ	だ	ん	そ	ろ	し	
な				か	え	か	っ	べ		お	い			
				も		た	か	ら					と	は

も	わ																	
お		な	か	っ	た													

㉟ 「蜘蛛の糸(芥川龍之介作)」

「或る日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶらお歩きになっていらっしゃいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のようにまっ白でそのまん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂いが、絶間なくあたりへ溢れて居ります。極楽は丁度朝なのでございましょう。」

あ				し	ゃ	か	さ		く	ら	く	の
る		と		ぎ	い	ま	あ	ま	ご			
		ひ	の	こ	で	ご	す	は				

す	い	け	の	ち	と	づ		あ	る	き	に	な	っ
は		ふ		ひ	り	ら		お					
				を		で	づ	ら					て

				け	の	な		す	の	は	な	
ら	っ	し	ゃ	い	ま	い	か	い	て	い	る	は
い				し	た		に	さ			は	

ん	な	ま	の	よ		し		の	ま	ん	な	か	に
み		た		お	ま	っ	ろ	そ					あ
				に		で							る

ん	い	の	ず	な		よ	お
き		い		ん	え	ない	い
		か	ら	は	と	も	い
							が

え	ま	な	あ	ふ		く	ら	く	は
た		た		あ	れ	り	ま	ご	
		く	り	へ	て	お	す		

お	ど	あ					
ち	よ	さ		ざ	い	ま	し
		な	の	で	ご	お	

前記の「私はあさって映画を…」と、AからDまでの文のアクセントを表記するに当たり、アナウンサーの平均的な読み方による音の高低を参考にした。

㊦ 「男はつらいよ寅次郎」の台詞

東京式アクセントの三線式表記の適用例として、最後に映画「男はつらいよ寅次郎」の冒頭に登場する寅さん（渥美清）のおなじみの台詞をとり上げる。「私、生まれも育ちも葛飾柴又です。帝釈天で産湯を使い、姓は車、名は寅次郎、人呼んでフーテンの寅と発します。」

上記の寅さんの台詞は、映画の音声からアクセントの高低を採った。

た	く	し	ま	れ	も	だ	ち	つ	し	か
わ		う		そ		か		ば	ま	た
					も			し		です

い	し	ゃ	く		ぶ	ゆ	を	か	い	せ	く
た				う	つ			い		る	
			て	ん	で			は		ま	

は	ら		と	よ	ん	で	ウ	テ	ン	の	ト
な	と	じ	ひ				フ			ラ	
			ろ	う						と	は
											ま

7. 三線式表記法の課題と要約

前項6の良く知られている古典や詩・小説などの作品、話しことばの台詞などの適用例が示すように、東京式アクセントは、三段観

に基づく三線式で表記することが可能である。ただ、話しことばは生きているため、感情を伴う場合を含めその時々状況によって、拍と拍の間の音の高低の関係は必ずしも固定的ではない。

また、三線式の場合でも、拍数の多い頭高型および中高型アクセントの語や、それらの語に助詞が続くと表記が難しい場合もある。例えば、前項6の㊦「平家物語」の中の「ぎおんしょおじゃ」と「さらそおじゅ（2語とも中高型）の、いずれも助詞の「の」の音が表記よりも低くなる。㊦「男はつらいよ寅次郎」の中の「とらじろお（中高型）の最終拍の「お」が、表記よりも音が低くなる。これらの点が三線式の抱える課題である。拍数の多い頭高型・中高型アクセントの語は、四線式や五線式であれば表記できるが、四・五線式は音楽の楽譜のように複雑になるため、より理解しやすいアクセント教育にはそぐわない表記法である。

このように不完全ではあるものの、語や文のアクセントに関する三段観に基づく三線式表記法は、二段観に基づく表記法に比べ、実際の音の高低と表記上の異なる語数が少ない上、よりアクセントの実態に近く、視覚的にも理解は容易である。このような表記法により、アクセントの音の高低についての表現もより容易になると思われ、結果的に共通語・方言を問わず、日本語アクセントへの関心が高まればと思う。

参考文献

- ①「標準日本語の発音・アクセント」・佐久間鼎著・恒星社厚生閣・1964.5.15
- ②「日本語アクセント」・金田一春彦著・論集日本語研究2「アクセント」より・有精堂出版・1980.2.20
- ③「アクセント・イントネーション・プロミ

- ネンス」・和田實著・論集日本語研究2「アクセント」より・有精堂出版・1980.2.20
- ④「ピッチグラムで見た日本語のアクセント」・川上薫著・論集日本語研究2「アクセント」より・有精堂出版・1980.2.20
- ⑤「文と文アクセント」・山口幸洋著・論集日本語研究2「アクセント」より・有精堂出版・1980.2.20
- ⑥「国語アクセントの史的研究」・金田一春彦著・塙書房・1981.12.10
- ⑦「具体音声から抽象されるもの」・川上薫著・「国語と國文學」9月号・東京大学国語国文学会・2000.9.1
- ⑧「認知化学とピッチアクセント研究」・北原真冬著・「音声研究」第6巻第2号・日本音声学会・2002.8
- ⑨「日本語発音アクセント辞典」・NHK放送文化研究会編・2000.11.20
- ⑩「新明解日本語アクセント辞典」・金田一春彦監修・秋永一枝編・三省堂・2001.6.1